（右）母里小学校の餅つき会。保護者や地域の人が駆けつけました。（左上）赤屋小学校のクラブ活動では安来節を習います。（左下）同校の「わかばと交流会」の木工体験の様子。

特集 ふるさと教育

地域が先生

学校教育の中で「ふるさと教育」が実践されています。市内の小中学校でも、地域の伝統文化や歴史、偉人などを題材に取り組まれています。

一方で、この「ふるさと教育」に地域の人が関わることが求められています。そこに住む人の知識や人柄に触れることも、ふるさと教育の目的の一つです。

地域の人や文化を通じてふるさとを学ぶ

12月初旬の平日の昼過ぎ、慣れた様子で赤屋小学校に登校してくる大人たちがいます。この日は校章に名前が由来する「わかばと交流会」の日。20年以上も続く同小学校の大きな行事の一つです。近年では、この交流会をふるさと教育の場として位置づけ、地域の人が講師となり、地域の文化や地域の人の持つ技を体験することにしています。今年は4人の講師が、しめ縄作り・木工・手芸・そば打ちを指導します。

「最近の子どもたちはわらに触れることがなくなった。わら自体が無いですよね」と話すのは、子どもたちに今回初めてしめ縄づくりを教えることになった川上和實（かずみ）さん。次々に聞きに

くる子どもたちの相手をしながら「子どもたちには何事も経験が大事という気持ちで教えています」と指導方針を明かします。また、「しめ縄づくりを通じて、なぜ正月に飾るのか、どんな意味があるのかを伝えるよう心がけています」と語ります。

同校の赤木寛子校長は「教員だけでは伝統的なことを教えるのは難しいです。この交流会や〝総合的な学習の時間〟などでは、地域の人に協力してもらって助かっています」と話す一方で、「地域の人との出会いを通して、言葉だけでなく、様々なコミュニケーションの力を磨くことができます。また、子どもたちと地域の人が知り合いになりますので、見守りという安全面の観点からも有効です」と、ふるさと教育等で地元の皆さんに協力してもらう意義を強調します。

しめ縄づくりの終盤、はじめは「川上さん」と呼んでいた子どもたちが「川上先生」と呼ぶように。子どもたちと地域の距離がますます近づいていくようです。

苦労して作ったお米はとてもおいしかった

母里小学校の体育館に香ばしい匂いが漂っています。5年生が〝総合的な学習の時間〟で育てたもち米を使った「餅つき会」の日です。全校児童が3組に分かれて杵と臼を使った餅づくりを体験します。

同校5年生では「ふるさと教育」の一環として、地域の人に教えてもらいながら、田植え～収穫～脱穀までを年間を通じて学習します。5年生の栂瀬裕佳子さん（11歳）は「お米づくりは教室とは違う教え方だったのでとても新鮮な気持ちで取り組むことができました。昔の機械のこと、収穫したときは天気が悪くて苦労したことなど勉強になりました」と話してくれました。そして「自分たちで作ったお米が給食で出てきたときは、とてもおいしく感じた」と収穫の喜びも知ったようです。

餅つき会に招かれた栂瀬倫住（ともの り）さんは米づくりを指導した一人です。「いろいろな作業や手間を通して〝一粒〟の大切さを伝えたい。農業は天候に左右されること、農薬のこと、安心安全な食べ物のことを少しでも知ってもらえたらうれしい」と、子どもたちの心の中にも収穫があることを期待します。そして、「自分たちで作ったもち米からでき上がったお餅を食べてみたときの感想を聞きたいですね」と笑みを浮かべます。

▶「わかばと交流会」は、フリースクール（授業公開日）も兼ねて行われました。保護者をはじめ、地域の人にも校内が開放されています。

◀道徳教育郷土資料より。島根県教育委員会編。

県内中学生の道徳副読本に紹介
平和を求め続けた画家「加納莞蕾」

今年度から県内の中学生が活用する道徳の副読本「しまねの道徳」に、広瀬町出身の加納莞蕾が6ページにわたって紹介されています。莞蕾は世界平和を希求し、フィリピンのキリノ元大統領に対して日本兵戦犯の解放運動に尽力。「赦し難きを赦す」と記した書簡は大統領に大きな影響を与えました。

同氏の資料はゆかりのある安来市加納美術館に収蔵・展示されています。今秋には、同美術館前に顕彰碑が建立されました。市教育委員会では、道徳の授業を受けた中学3年生が、美術館で生きた教材に触れたり、名誉館長の話を聞いたりして、平和学習を深める機会を設けています。

特集 ふるさと教育

子どもたちと関わることに喜びが

「やすぅぎ～せんげ～～ん～なので～た～ところ～～」。

クラブ活動の日、赤屋小学校の音楽室では安来節の唄声が響き渡ります。「ふるさとクラブ」では、地域の先生から安来節の銭太鼓と三味線の手ほどきを受けます。冒頭では声出しのためにみんなで安来節を唄い、これから体験する民謡の世界に気持ちを切り替えます。

◀母里小学校の書き初め練習会も地域の先生が指導します。先生の栂瀬崇さんは「毎年来ていますが、地域の子どもたちの成長を知ることができるので楽しみにしています」。

「ふるさとクラブ」は、前期と後期に分かれて3年生以上の全員が参加。クラブ活動や〝総合的な学習の時間〟に安来節を採り入れるのは安来市らしい活動です。市内の他校でも取り組まれています。

安来節の先生は校区内に住んでいる野々村府美枝さんと川上博文さん。いずれも安来節保存会の会員で、野々村さんは唄の准名人、川上さんは絃の大師範です。本場ならではの贅沢な授業です。

「地域の小学校から声をかけてもらい、私の特技で関わらせてもらえることを喜んでいます」と話す野々村さんは、2年前から月一回以上のペースで同校のクラブ活動で安来節を指導。自身のお子さんの母校でもあるので、思い入れも人一倍あるようです。

「安来節は長い歴史があります。小さいときに安来節に触れたことで、大人になった時に安来節を思い出してほしいと思います。多少なりとも文化が継承できているのではないでしょうか」と話しつつ、「私たちも楽しんで教えています。大人が楽しそうにしている姿を見せることで子どもたちも受け入れてくれますから」と、伝統文化が引き継がれていくことを期待します。

クラブ活動で習った安来節は3月に開催される地元の「おひなまつり会」で、地域のお二人の先生と一緒に披露する予定です。

「ふるさと教育」は地域で支えます

今、子どもたちはいろいろな課題を抱えています。自然・社会体験の不足、思いやりの心の欠如、コミュニケーション能力の低下などが挙げられます。これらは、利便性を求めた社会や地域にも責任があるのかもしれません。

これらを解決していくためには、地域の「ひと・もの・こと」を生かした教育＝「ふるさと教育」が求められています。小中学校では、平成17年度から年間35時間以上のふるさと教育の授業を行っており、それぞれの学校で独自のカリキュラムが組まれています。しかし、進めるにあたっては学校・家庭・地域の連携が重要です。

市教育委員会学校教育課の仲西貴志社会教育主事は、ふるさと教育の意義を「目指すところはふるさとへの愛着です。今の時代は進学や就職で一度、市外・県外に出てしまう子が多数います。たとえ離れていてもふるさとで学んだことや体験した

▶赤屋小学校の皆さんに銭太鼓を指導する野々村さん（中央）。「4回の練習で振り付けを覚えますよ」。

ことが心の糧になります」と話します。また「地域で活躍する身近な大人から学ぶことで、自分が何のために勉強するのか、どんな大人になりたいかなど、自分の将来について考えていくきっかけにもなります」と効果を強調します。

市では、平成25年度から「ふるさと教育」の取り組みを強化。広瀬・伯太地域では、中学校区単位で三者（地域・家庭・学校）が協働して地域全体で教育に取り組む「教育支援活動運営委員会」が結成されています。

仲西社会教育主事は「地域の人が学校と関わることで、子どもたちはもちろんですが、〝大人のふるさと教育〟にもなります。地域を知り、その良さを再認識することで、地域が元気になります」と話しながら、「安来市は全国学力調査の生活アンケートの子どもたちが地域行事へ積極的に参加しているという項目が、県内でも高い数値になって出ています」と喜びます。

地域が支えるふるさと教育。積極的に進めていくことで「子ども」と「地域」が相互に成長していくことになるようです。

◀市長に披露する平原館長（左）と岩田館長（中央）

ふるさと教育に活用を「わたしたちのふるさと広瀬」を発行

広瀬地域の10の交流センターが協力して、各地の歴史や特産などをまとめたパンフレット・ふるさと再発見シリーズ「わたしたちのふるさと 広瀬」を発行しました。昨年３月に発行したものの第二弾。菅原地区の「梅の里」や西谷地区の「大槇神社と乳イチョウ」の紹介など、各地域の隠れた宝物を掲載しています。このパンフレットは広瀬地域の小中学生全員に配布され、ふるさと教育などに活用されます。

地域が積極的にふるさと教育に関わり、いい影響が地域にも現われ始めました

伯太地域教育支援活動運営委員会
委員長　稲田　郷さん

伯太地域では、平成27年10月から学校・家庭・地域が協働で取り組む、教育支援活動をスタートさせました。

近年、子どもたちの生活体験や自然体験が不足していると言われています。地域の未来を担う子どもたちの「生きる力」を育むため、家庭や学校だけに任せるのではなく、地域も役割や責任を自覚し、参加したいと考えています。

会の支援は、学校支援・教育支援・放課後支援に分かれており、地域の人の講師派遣は学校支援活動の一つになります。学校からの依頼に対して、地域から最適な人を探し、ふるさと教育や学習支援活動に派遣します。約一年の活動で地域から延べ５８３人に参加していただき、味噌加工グループのみそ造り、お茶農家見学、しょうゆ造りなど、子どもたちに新しい発見や体験、地域の良さを実感してもらえました。また、中学生の職場体験を委員会や地区交流センターなどが中心となり、すべて町内の職場でコーディネートしました。生徒が地域産業を学習し、それを校内で発表することでふるさと伯太について理解を深めてもらえたと考えています。

地域にもいい影響が出ています。活動が楽しみや生きがいとなり、地域活動へ積極的に参加する人が増えました。活動が地域にも波及し、地域の輪の広がりを感じています。